



Title	兼家の歌に自ら返歌する前の道綱母：『蜻蛉日記』上巻の「今これより」と「しれたるやうなりや」の検討を通して
Author(s)	堤, 和博
Citation	語文. 2024, 122, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/98206">https://doi.org/10.18910/98206</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 兼家の歌に自ら返歌する前の道綱母

——『蜻蛉日記』上巻の「今これより」と「しれたるやうなりや」の検討を通して——

堤 和 博

はじめに

本稿で取り上げるのは『蜻蛉日記』上巻冒頭部の兼家からの求婚場面に続く次の場面である。

これ（兼家からの最初の求婚歌（1番歌）を指す）を初めて、またくもおこすれど、返りごともしせざりければ、又、

おほつかな音無き滝の水なれや行くへも知らぬ瀬をぞた

づぬる（3・兼家）

これを、「今これより」といひたれば、しれたるやうなりや、かくぞある。

人知れず今やく／と待つほどにかへり来ぬこそわびしかりけれ（4・兼家）

とありければ、例の人、「かしこし。をさくしきやうにも聞えむこそよからめ」とて、さるべき人して、あるべきに書か

せてやりつ。それをしも、まめやかにうち喜びて、しげうかよはず。<sup>①</sup>（波線は引用者）

問題の中核は太字部分の一文で、特に「今これより」と波線部の検討が重要となる。波線部について斬新な解を示した今西祐一郎<sup>②</sup>の言葉を借りて波線部を除いた太字部分の大筋をまず押さえておく。

道綱母はただちに返歌をしたためることはせず、兼家の使者に「すぐあとで、こちらから使者を差し上げます（「いま、これより」）」と口上を伝えたところ、兼家からはまた歌がとどけられた

さて、この場面における道綱母の内面を考えるには、この大筋からは除かれている波線部の正確な把握が欠かせず、古来幾つもの解釈案が出されている。そこに今西の斬新な説が出たのである。ところで、今西の大筋では「使者に……と口上を伝えた」となっ

ていて「使者」に伝えただけのようでもあるが、「いひたれば」でもって実質的には兼家に言った、つまり「今これより」は兼家に伝わって4番歌があったとみるのが、今は通説となっている。今西論文でも同様のようだ。しかし近時高野浩<sup>4</sup>が、この通説に異を唱えながら波線部と4番歌に解釈を施している。私自身は、3番歌以降の歌については言及したことはあるのだが、散文部分に踏み込んで当該場面全体を検討することはなしていない。この度は高野論文から刺激を受け、問題の一文の検討を試みる。今西、高野の説に注意を払いながら、旧説の中から最も妥当な見解を取り出すことになる。その上で、当該場面の描く様相を明らかにしつつ前稿で述べた内容の補強をしたいと思う。

## 一 「今これより」

説の分かれる波線部の解釈を考えるためにも「今これより」から先に押さえておきたい。先の今西の大筋ではこの言い回しで「使者を差し上げ」ることも含意しているとされているが、「使者」には返歌を託すことも当然含意されているとみられ、より重要なのはこちらの方である。一方道綱母の内心に踏み込めば、後で実際に返歌するつもりがあったかどうかはここでは明示されていないことになる。しかし、注釈書を見渡すと、例えば『大系』<sup>6</sup>は「口実だけで、返事をしない気でいたの」とし、『全注釈』は「作者は「今これより」といってにおいて、返事をしない気でいた」としている。これを今西も高野も古くは『注解』なども批判する。こ

のような道綱母の内心は書かれていないと言うのである。

しかしここから道綱母が返歌しない気でいたことを読み取ってよいと考える。つまり、「今これより」は、『大系』の言葉で言えば、返歌しない「口実」であったのだ。あるいは、『集成』が「今これより」の部分に「のちほどこちらから」という訳をあたえ、頭注で「態<sup>7</sup>のよいことわりの言葉。」と注するのがより正鵠を射ているであろう。

道綱母に返歌する意思がなかったと思われるのは、4番歌の後の描写にもよる。道綱母ではなくて母親<sup>8</sup>の指示によって代作の返歌を贈ったという。4番歌を受け取ってもなお道綱母は返歌する意思を頑なに見せないのだから、3番歌を受け取った時点でも当然そうであろう。「今これより」と言っている以上ここでは返歌するつもりだったかあるいは迷っていたと言うのなら、返歌することについての道綱母の心境が短期間で頑なな方へ逆流していったことになるが、そんな感はない。道綱母が「今これより」と言うのは、返歌しない口実だとみてよからう。

そこで、このように口実をもうけながら返歌しない類似例を挙げて検討したいのだが、なかなかびつたり例は見つからない。『蜻蛉日記』の中では、下卷天禄三年八月、道綱が大和だつ女に立て続けに六首の歌を贈るけれども一首しか返歌を得られない場面での大和だつ女の言動などはどうであろう。まず道綱が20番歌を贈ったところ、なぜか角筆で20番歌を返し、「たちかへり」道綱は203番歌を贈る。これに対しては「暗し」とて、返りごとなし」で

あった。翌日道綱が204番歌を贈ると、今度は「物へなむ」とて、返りごとなし」である。その翌日帰宅したことを見込んで道綱が204番歌の返歌を乞うと、「昨日のは、いと古めかしき心ちすれば、聞えず」と言う。道綱は続けて翌日に「一日は古めかしとか。いとことわりなり」という言葉と共に205番歌を贈るが、「けふあすは物忌」と、返りごとなし」であった。忌明けの頃に206番歌を贈ると、「このたびも、とかういひ紛らは」すだけで、返歌はしなかったらしい。さらに道綱が207番歌を贈ったところで話題が変わってしまう。

ここには大和だつ女の返歌をしない口実が見られる。特に外出とか物忌とかは、本当かもしれないが、「とかういひ紛らは」すと言つて道綱母があまり信じていないように、嘘臭くもある。大和だつ女は明らかに返歌を避けようとしているのだが、3番歌を受け取つた道綱母も、返歌することに少なくとも気乗りしないのであり、「今これより」も大和だつ女の口実と同様、遠回しな拒絶とみてよいと考える。

## 二 「しれたるやうなりや」(波線部)

以上を踏まえて波線部の解釈に移る。今西並びに高野の整理のもとに従来の解釈案を整理すると(CとDは本文改訂もなされている<sup>⑨</sup>)、次のようになる(括弧内は主な注釈書等)。

A 痴れたるやうなりや

### ① 連続して歌を寄越す兼家の態度を批判(『注解』)

② すぐに返歌をしないことに対する自嘲(『新釈』)  
B 知れたるやうなりや 返歌しないこちらの内心を分かっているように(『解釈大成』)

C 知りたるやうなりや Bに同じ(『全注釈』)

D 強ひたるやうなりや 兼家が返歌を強要してきた(今西)  
Aについては今西も高野も否定的見解を述べており、それに従つてよいと考えるので簡単に触れておく。A①は当時の求婚時の風習からしてこのような批判がなされるとは考えがたい。A②については、前後の道綱母の態度からしてここだけこんな自嘲をするとは解しがたい。BとCを後回しにしてDについて考える。これが今西の斬新な解で、道綱母が4番歌を「強引に返歌を強いるような詠みぶり」の歌だと受け取つたことを示すとの見解である。しかし4番歌は、後で検討するように、返歌がないのが辛いという訴えに収斂していく形の、返歌をもらえない男なら普通に詠むような内容の歌で、これをもって「強引に返歌を強い」ているとは受け取らないと思う。同様の批判は既に高野からも出されている。

ということで、BかCか、『全注釈』の検討によれば本文改訂が加わっているもののCの方が浮かび上がるのだが、いずれにしても「今これより」には表面上表れない道綱母の内心を想定しなければならぬところが今西や高野等から批判されていることは既に述べた。が、前節での検討によつてこの批判は当たらないと考える。そこで3番歌の直後の懸案の太字部分を説明的に意識すれ

は、(後ほど返歌はこちらから届けさせますと(断りをそれとなく)言つてやったら、こちらの内心をちゃんと分かっているようなのか、このような歌が届いた)となる。「今これより」を「ことわりの言葉」のつもりで言つた道綱母ではあるが、それは直截的なものではなく「態<sup>てい</sup>のよい」ものであったので、(右の訳の括弧内が)兼家に通じるかどうかは疑問であつたのであらう。それが通じたことを感想的に示すのが波線部であると見なされる<sup>10</sup>。

では、この解は次の兼家の4番歌の内容と整合性があるのだろうか。結論から言うと、例えば『解釈大成』が「内心<sup>なこころ</sup>、あなたからのお返事をもう届くかもう届くかと待つておりますのに、いつまでたつてもいただけないのはまことにつらいことです。」と訳しているのに従えばよい。「今これより」という言葉から返歌を寄越さないで済まそうとする道綱母の真意を感じ取つた兼家が、その辛さを訴えている歌とみられるのである<sup>11</sup>。

また、この歌の「かへり来ぬ」のところに(使者が帰つて来ない)の意も掛かっているとみるむきもあるが、『解釈大成』のようにそれは認めなくてよからう。<sup>12</sup> いずれにせよ、4番歌の内容からしても、「今これより」という「態<sup>てい</sup>のよいことわりの言葉」で自分の真意がちゃんと伝わつたと道綱母が思い、「知れ(り)たるようなりや」と感想を挟み込んだと解かれるのである。あるいは、注10で述べたことからすると、(私の言葉を真に受けるのではなく真意をちゃんと掴んでいるようだ)というところまで感じ取つてよいかもしれない。

### 三 「今これより」は兼家に伝わつたか

さて、本稿冒頭で確認した状況把握に異を唱える高野説は検討しておかなければならない。高野は、「今これより」といひたれば」という記述から明確に分かるのは、兼家からの使者には道綱母からの返事が託されなかつたことだけであり、それを見越していた兼家が使者の帰りを待たずに別の使者を派遣して4番歌をもたらした経緯がこのあたりに表現されていると説く。が、端的に言つてしまうと、この行文でそれほどの内容が表現されているのか大いに疑問なのである。

まずは、当該場面のように、道綱母と兼家が別地点にいる時に二人の意思疎通がなされる場合の『蜻蛉日記』における表現を考えよう。当然二人の間には使者が介在する。その際、使者の存在に言及する場合もあるが、それは言及する何らかの必要性がある場合がほとんどではないか。普通は使者の存在は自明のこととして言及されないまま二人の遣り取りが描写される。当該場面では「今これより」の一言は実質的には兼家に対して発せられたもので、兼家に伝わるのが普通である<sup>13</sup>。それが、「使ひ」という言葉も出さずに、(言葉が使者に伝えられたが、それが兼家に伝わる前に……)という普通でない状況が描写されているとみるには無理を感じる。当該場面の書き方は兼家に伝わつた普通の状況の書き方だと思ふのである。要するに、「いひたれば」とは、実際には使者に言つたのであるが、これで道綱母が兼家に言つた、兼家に伝

わった(と少なくとも道綱母側では見なししている)という意味だ(注3の『解釈大成』の訳参照)と解さなければならぬ<sup>(14)</sup>。ちなみに、「今これより」と兼家の使者に言ったのは実際には道綱母の侍女であるはずだが、侍女のことに言及しない。道綱母↓(侍女↓使者↓)兼家のうち、括弧内は表現の外にあつて、「いふ」だけで道綱母が兼家に言ったという意味になるのである。

自説を補強するのに高野は、「いひたれば」の「ば」が順接の確定条件を表す接続助詞で、「單純接続を表す」ものである点にも注意している。そして、「今これより」という言葉と4番歌とは「前後の關係はあれども因果關係はなく、口上を聞き知つてはいない、兼家が「人知れず」歌を詠むことについても矛盾は生じない」(傍点は引用者)と説明する。確かに矛盾はないが、これは、口上を聞き知った兼家が歌を詠んでも矛盾のない表現である。するとやはり本文には書かれていない傍点部分はどこから出てくるのか疑問である。波線部を挿入句とみたら「今これより」といひたれば、かくぞある」という構造であると見なせるこの部分は、「今これより」と兼家に言ったら、兼家からこのような歌がきた」と読み取る方が自然である。

また、実際問題としてもどうであろう。兼家からの使者が3番歌を持ってきて帰って行くまで、道綱母の返歌の有無に関わらず、通常以上に時間を費やした様子は本文からは全くうかがえない。使者はほぼ予想された時間で兼家邸に戻ったはずだ。高野はそれよりも前に兼家は別の使者を仕立てて4番歌を届けてきたとみる。

兼家ならやりそうな気もしないでもないが、かなり特異ではある。そこに高野は兼家の強引さを読み、かつ、4番歌の「かへりこぬ」には「返歌がかえつてこない」と「使者が帰つてこない」の二意が掛けられているとし、「わざとらしさを隠しもせず訴える」と説明している。しかし、使者が帰ってくるはずのない時点で早くも「かへりこぬこそわびしかりけれ」と言うのは「わざとらしさ」という以上にいかにも不自然である。求婚当初からそんなことをやってくるのなら道綱母の印象にも強く残つたであろう。ならば、また表現の問題に戻るが、「使ひ」という言葉も使いながらもう少し丁寧な叙述になつたのではないか(注13参照)。さらに臆測をたくましくすれば、当該場面の直前の求婚場面では批判的な叙述をした道綱母なのであるから、続いてこのようなことがあれば、やはりもっと批判的な態度あるいは叙述になつたと想像する。

高野の波線部の理解もみておく。高野は波線部については、本文はBに従つて「即座に返歌を使者に与えなかつた」というその事実を、兼家が前もって察知していたかのようにだと解している。そこで当該場面について確認すると、道綱母が「今これより」という言葉を発した点は従前と異なるが、即座に返歌しない点は従前通りである。すると、高野の理解によれば、従前と違う点ではなくて従前通りの点を捉えて(兼家は事前にその点を察知していたように)と言っていることになり、どうも解せない。そもそも高野の言う「その事実」は論理的には出てくるが、表現されてはい



ない。交々勘案すると、〈今までと違って何らかの言葉だけは伝えることを前もって察知していたようで〉という解なら成り立つとは思うのだが、それならそんなことをどうやって察知したのかと思うし、道綱母の発言の内容を知らないうちから兼家が4番歌を返すのは、一層不自然になる。

このような疑問からして高野説は受け入れがたく、本稿冒頭で引用した今西の提示した大筋通りの状況、要するに通説通りの状況がやはり想定される。

#### 四 「今これより」の発言者について

さて、結局問題の一文では使者の存在は意識されずに叙述されているとみるのだが、使者に「今これより」の言葉を伝えた道綱母側の事情に関しては、『ほるぶ』に「男からの手紙に、女は最初からは返事を書かない。それで周りの人がとりなしている。」という解説がある。道綱母は3番歌の前の「返りごともしせざりければ」と同様無視しようとしていて、「今これより」は侍女の裁量で兼家の使者に伝えられたというのである<sup>(16)</sup>。そうすると波線部は、(兼家は無視をきめこうとするが侍女がとりなそうとしているという事情を察したようで)というほどの意味となり、辛さを訴える兼家の4番歌の内容ともより合致するように思う。ただやはり、前節で指摘したように、このあたりは侍女や使者の存在は消されて叙述されていると考えたい。

そこで反例として町の小路の女が出産した報を兼家から受けた

箇所をみる。その中に、「使に人間ひければ、「をとこ君になむ」といふを聞くに、いと胸ふたがる。」という一文がある。生まれたのが男女いづれか道綱母は内心気になっていたが自らは聞く気がしなかったのであろう、「人」(侍女と思われる)が兼家の「使」に聞いて道綱母に報告したと理解できる。侍女が自らの判断で使者に問うたと思われるこの場合は、「人」という主語が明示されている。道綱母の指示を受けないで侍女が行動を起こす異例の場合だからそれが分かる書き方をするのだ。一方その情報が道綱母に伝わる過程では、「といふを聞く」としかない。「いふ」の相手は侍女で、さらに侍女が道綱母に言ったのを道綱母が「聞く」のだが、ここらでは「人」(侍女)という言葉は消える。通例の伝達過程だから一々書く必要がないのだ。当該場面に戻ると、「今これより」は道綱母の指示によって使者に発せられた通例の場合だからこのような書き方になっていると考えられる。もし道綱母の指示によらずに「周りの人がとりなしている」のであれば、「今これより」といひければ」などの書き方になっていたであろう。

ところで、当該場面の直後(5番歌の直前)に「また、添へたる文見れば」とあるが、これが何に添えてある「文」だということから分らない。ここに対しても『ほるぶ』は「男の手紙は、女の召使いのもとに来る。それに本人あての手紙が添えてある。」と「女の召使い」の存在が意味されているとみる。しかし、「女の召使い」のもとになるのが普通なら一々「添へたる」とは書かないであろう。他にも同様の書き方はなされていないと思う。

## 五 前稿の補強（まとめを兼ねて）

ここから前稿で言及した内容の補強に移りたいので、まずは前稿の概要に言及しておくことをお許し願いたい。

兼家からの最初の求婚歌（1番歌）とそれに返した2番歌の後、当該場面に入って「またくもおこすれど、返りごともせざりければ」という状態であったところに兼家からの3番歌があり、4番並びに当該場面の後の5番6番の兼家の歌には侍女の代作を返すようになる。そして「秋つ方になりにけり。」とあって、7、10番歌では二人の贈答歌が成立し、さらにその後で新枕・結婚となる。注5拙著では、特に上巻前半部のこのあたりにおいて、道綱母は兼家に心が傾いていく面があつてもそれをはっきりとは描写しない傾向があるところに注意していたのだが、自作の返歌を拒絶する当該場面から新枕を受け入れるまでの描写されない道綱母の心境の推移は、遣り取りされる歌に表れていると考えたのが前稿であつた<sup>(18)</sup>。その際、特に兼家の3番歌と「浜千鳥跡もなきさ<sup>(19)</sup>にふみ見ぬはわれをこす波うちや消つらむ」という5番歌に注目し、正統な歌語も詠み込まれた古今調の両歌の詠みぶりを1番の求婚歌と比較して、「当初は倫寧に話をつけてそれでほとんど事が成ると思つていた兼家だが、道綱母が和歌に拘る女性で求婚歌にも求婚方法にも不満であるのにさすがに気が付いて態度を改めて作歌に力を入れていき、道綱母も徐々にそれを認めていったということではないか」という想定をなしたのである。

さて、本稿では今西の考えにも反する形で論を進めてきたが、実は同時に、今西の論述には前稿における私論にとつても示唆的なところが大いにあると考えている。

今西は、それまで兼家の贈歌を無視してきた（返りごともせざりければ）道綱母が「今これより」と答えたのは、道綱母に「何らかの形で従前とは異なった応対の用意あつてのこと」であるから、この時道綱母が本当は返事を出すつもりはなかったなどとは言えないと言う。また兼家側にしても、「事態の一步前進であり、その成り行きに期待する」であろうと言う。

今西のこの論を示唆的に受け取つて前稿での考えと繋げると、まず道綱母側からすれば、今までの完全無視に近いところから「今これより」という「態のよいことわりの言葉」を伝えたことが「従前とは異なった応対」であると考ええる。今西は「相変わらずの無視を続ける」ならこの「言葉は不要」だと言うが、頑なに返歌をしないのは従前通りだが、この言葉を送ることは、小さいかもしれないが、道綱母の気持ち<sup>(20)</sup>が推移したことの表れであるのだ。それまでは「言葉は不要」であつたのが必要になつたのだ。兼家が「作歌に力を入れていき」それが道綱母に認められたという前稿で示した想定は、3番歌の詠みぶりが道綱母に認められ、「今これより」に繋がったところに具現化していると言つてよいのかもしれない。同時に、はっきりとは書かれない道綱母の兼家に傾いていく心をここに垣間見ることができるといふわけである。その心境の変化は小さかつたかもしれないし、あるいはそれなりに大



きかったかもしれない。とにかく態度に示すのは小さなもので、ここではまだ「今これより」と伝えるに留まったのだらう。兼家側にすればこれで「事態の一步前進」というか少なくとも半歩前進なのであり、「態のよいことわりの言葉」に対して辛さを訴える4番歌をすかさず詠み贈ったものと捉えられる。ちなみに、今西は「成り行きに期待」した兼家が、道綱母が「強ひたるやうなりや」と思うような「強引に返歌を強いるような詠みぶり」の4番歌を詠んだというが、「成り行きに期待」しながら「強引に返歌を強いる」のは解せないし、4番歌はそのような歌ではないことは既に指摘した。

道綱母にとって次に問題になるのは、「態のよい」この言葉を兼家がどう受け取るかである。前述の通り、兼家はこちらの意向を正しく汲み取り、返歌がこないことを見越して辛さを訴える4番歌を贈ることで応えてきた。これで兼家は話の通じる男であるのが分かったのだ。この点からすると、波線部は兼家に合格点を出しているとも言えそうで、直後には、母親の介在があるが、代作歌を贈るに至っている。さらに半歩前進である。続く「それをしも、まめやかにうち喜びて、しげうかよはす。」という叙述からは、兼家の態度に満足する道綱母の心境を読み取ってもよいであろう。この後も、5番6番の兼家の歌が載せられ、やはりそれにも代作で応えている。兼家は「このたびさへなうは、いとつらうもあるべきかな」と6番歌に書き添えて道綱母の自作の返歌を求める。道綱母が自分に心を傾けつつあるのに兼家が手応えを感じ、ここ

ぞと返歌を強く求めるのはこの時点であらう（少なくとも道綱母はそう認識しているのであらう）。そして「秋つ方になりにけり。」と言ってから初めて贈答歌が二組（7／10番）載せられ、新枕に引き続き結婚成立となるのである。

前稿では散文部分に一切触れないままに想定を巡らしたのだが、当該場面の散文部分を考慮に入れても、以上のように考えられるのである。

#### 注

(1) 『蜻蛉日記』からの引用は、桂宮本を底本とする角川文庫『蜻蛉日記』（柿本奨校注・一九六七年一月・角川書店）による。歌番号も同じ。ただし、波線部は桂宮本のまま。桂宮本は、笠間影印叢刊68『桂宮本蜻蛉日記（上）宮内庁書陵部蔵』（一九九二年三月再版）による。

(2) 『蜻蛉日記』注釈余滴（二）（『文献探究』21・一九八八年三月）。『新大系』でも同様の解釈が示されている。

(3) おそらくこの点を考慮に入れてのことであらう、『解釈大成』はこのあたりに「……と言つてやると、……追いかけて次のような歌が届けられる（傍線は引用者）」という訳をあてえている。

(4) 『蜻蛉日記』兼家の催促の歌試解「しれたるやうなりや」、「人しれず」歌を中心に」（『平安文学の饗宴』二〇二三年三月・勉誠社）。

(5) 拙著『蜻蛉日記上巻前半部研究』（二〇二〇年一〇月・新典社）の「第一章 兼家からの求婚場面、「序段」（12番歌） 第二節 兼家からの求婚歌到来の場面——上巻前半部の「序段」としての役割・追考——」（付）（1）として「補足 結婚成立までの贈答歌」

という小文を加えておいた。そこで、3、10番歌については言及し  
てある。以後「前稿」というのは、この小文を指す。

(6) 各注釈書は略称をもつて示す。本稿末の一覧参照。

(7) ここで「返事」とされているが、各注釈書等を見渡すと「返事」と「返歌」が混在している。ただ、「返事」の中には当然歌が含まれていようから、「返事」とあっても「返歌」とあっても違いはないものと考ええる。今西の大筋においても「これを」がかなり踏み込んで意識されているのは、「返歌」の有無が重要だとみているからこそであろう。

(8) 4番歌の直後に出る「例の人」は定説通り母親とみられる。母親は最初の求婚歌（1番歌）到来の時と同様に恐縮している。

(9) 波線部の異同の詳細は、上村悦子「蜻蛉日記校本・書入・諸本の研究」（一九六三年一〇月一日・古典文庫）並びに『注解』など参照。もと「しれたるやうなりや」であったとみるか、あるいはそこからさらに改訂して「しりたるやうなりや」であったと想定するか、どちらかで考えればよいであろう。

(10) 「返事をしない気でいた」道綱母の内心について、高野は「読者にも明示はされていない」とも言う。道綱母が想定していた「蜻蛉日記」の読者の範囲は非常に難しい問題だが、このような書き方で内心まで伝わるような範囲の人を想定していたのであろうと考えたい。一方、この時点で兼家がこの表現をどう解するかについては疑問であったのだろう。

(11) 今西は、BCについて「無難なところが長所」と言い、BCで解すと4番歌は「返歌はまだなのかという焦燥を述べた歌」と解せると言う。ただ、この解は「いま、これより」という道綱母側の言葉を一言一応は真に受け、いても成り立つ、つまり返歌しない気でいる道綱母の内心を想定しなくても成り立つと言って、内心を想定することに（即ちBCをとることに）あくまでも否定的である。しか

しそれは、この歌の眼目が「返歌はまだなのかという焦燥」（傍線は引用者）にあるとみるからで、『解釈大成』のように「いつまでたつてもいただけない」（傍線は引用者）という辛さに眼目があると思えば、兼家は道綱母の内心を察知していたことになる。

(12) 前稿における検討により、6番歌とこの歌は、掛詞をはじめとする技巧は何ら凝らされていない直截的な詠法の歌である可能性の方が高いと考える。

(13) 一々の例を検討できないが、中巻天禄元年六月にある書き方などは当該場面と対比して考えるのに有効ではないだろうか。（引用冒頭鉤括弧内は兼家からの手紙の文面）

「……今日もと思へども」などぞあめる。これかれ、そのかせば、返りごと書く程に、日暮れぬ。まだ行きも着かじかしと思ふ程に見えたり。（傍点は引用者）

「使ひ」などの言葉は使われていないが、道綱母の「返りごと」を持って使者が兼家の許に行くのが明確に読み取れる書き方になっている。それは言うまでもなく、使者がまだ先方に着いていないであろう時点（傍点部）で早々に兼家がやって来たという手紙の遣り取りからすれば普通でないことが起きた様を描写しているからである。口頭による伝達でも同様で、当該場面がもし高野の想定するような状況であったなら、当該場面にも傍点部のような記述があるであろう。

(14) 同様の例は、当該場面の近くでも歌に関するものに多く見られる。即ち、道綱母の歌があつて「などいふ」と書かれているところが目に付くのである。例えば、10番歌に続けて「などいふ」と書かれ、15番歌に続けて「などいふほどに、九月になりぬ。」と書かれている。これらの「いふ」も（手紙に認められたのであろうが）歌が兼家に伝わったことを示しているよう。そこで結婚後の当該場面と同年の十二月、兼家が横川に登山した折りの記事を考えてみた

い。まず兼家から降雪のために下山できない旨の手紙が届く。それに対して道綱母は23番歌を詠んで「ないひて、その年はいかなく暮れぬ。」とある。降雪のために兼家らは下山できないのに、手紙を持った使者は道綱母の邸まで来ている。では、使者が23番歌を持って再度横川に登るのは可能だったのだろうか。23番歌は独詠歌で、そのままその年は暮れてしまったとも解せそう。しかしそうではあるまい。使者は23番歌を持って再び横川まで雪の中を行ったのである。それが「いひて」の一言に含意されている。使者というのはこのように黒子扱いされ、その存在に「一言及せず」に、道綱母から言葉にせよ手紙にせよが兼家に届けられたという意を「いふ」が担う場合が多いのである。なお、天曆十年六月「……独りごと」に、(道綱母の36番歌略) などいふほどに、七月になりぬ。」とある。これは明らかに独詠歌であるから、「などいふ」でも必ず兼家に贈ったことになるわけではない。しかしこの場合独詠歌と分かるのは、言うまでもなく、「独りごと」と明示されているからである点に注意である。

(15) 注5拙著の第一章参照。

(16) あまり明確ではないのであるが、『新注釈』も「今これより」を侍女が自らの判断で言った言葉と解しているようだ。

(17) 『はるぶ』は、波線部の本文をAとして、「ばかしら」と訳している。

(18) 7〜10番歌に関して補足しておく。まず歌のみ引用しておく。

鹿のねも聞えぬ里に住みながらあやしくあはぬ目をも見るかな

(7・兼家)

高砂の峰の上わたりに住まふともしかさめぬべき目とは聞かぬを

(8・道綱母)

逢坂の関やなかなか近けれど越えわびぬれば嘆きてぞ経る

(9・兼家)

越えわびる逢坂よりも音に聞く勿来をかたき関と知らなむ

(10・道綱母)

前稿ではこのうちの兼家の歌を取り上げて、「3〜6番歌では返事がこないとか自筆の返事が欲しいとか訴えていた兼家が、7番歌では逢うことを問題として9番歌では逢えそうで逢えないなどと言っている。この間の道綱母の心境の変化を『蜻蛉日記』は何も語らないのだが、歌の遣り取りと共に道綱母の心が兼家に傾きつつあったのが窺えるではないか。」と述べた。即ち、道綱母の方に心境の変化があったればこそ兼家の歌の内容も変化していったのだと思うのであるが、その心境の変化を道綱母は語ろうとはしない。しかしそれは、歌の内容から読み取れると考える。また、道綱母の返歌をみても、鋭い切り返しになっているのは、兼家の愛情を受け止めようという気になってきたなればこそであると考えてのである。

(19) 兼家からの最初の求婚歌に対する道綱母の不満足感については、注5拙著の「第一章 第一節 上巻前半部の「序段」としての兼家からの求婚場面」で検討している。

(20) 「まめやかにうち喜びて」については種々の見解がある中、「注解」が「ぶさに検討した結果「兼家の喜ぶ態度の「まめやかさ」を意味し、「喜ぶ様子をきちんと見せて」ぐらいに解すべきではないかと思う」というのが参考になる。

本稿で略称を用いて引用乃至言及した注釈書は次の通り。

『大系』―川口久雄校注、日本古典文学大系20『土左日記 かげろふ日記 和泉式部日記 更級日記』(一九五七年十二月・岩波書店)

『全注釈』―柿本奨、日本古典評釈全注釈叢書『蜻蛉日記全注釈上巻』(一九六六年八月・角川書店)

本稿を、大阪大学とともに学んだ近本謙介君の御霊に捧ぐ

(つつみ・かずひろ 徳島大学大学院教授)

『注解』——秋山虔・上村悦子・木村正中「蜻蛉日記注解三」(『国文学  
解釈と鑑賞』27巻8号・一九六二年七月・至文堂)

『集成』——犬養廉校注、新潮日本古典集成第54回『蜻蛉日記』(一九八  
二年一〇月・新潮社)

『新釈』——次田潤・大西善明『かげろふの日記新釈』(一九六〇年七  
月・明治書院)

『解釈大成』——上村悦子『蜻蛉日記解釈大成第1巻』(一九八三年一  
月・明治書院)

『ほるぶ』——増田繁夫校注・訳、日本の文学古典編8『蜻蛉日記』(一  
九八六年九月・ほるぶ出版)

『新大系』——今西祐一郎校注、新日本古典文学大系24『土佐日記 蜻  
蛉日記 紫式部日記 更級日記』(一九八九年一月・岩波書  
店)

『新注釈』——大西善明『蜻蛉日記新注釈』(一九七一年一月・明治書  
院)

## 付記

拙稿「日記文学の始発——『蜻蛉日記』上巻前半部を中心に——」(『中古  
文学』Ⅲ・二〇二三年五月)の〈付記〉で、「拙著(本稿注5拙著を指  
す)においては、和歌だけを分析しているのではなく、所謂地の文に相  
当するところにも十二分に意を払って検討したつもりである。(中略)  
散文の「役割」には充分に意を払ったつもりなのである。」と述べた。こ  
れは、和歌を中心に分析した拙著において、散文も完全に検討したとい  
う意味ではもとよりない。それにしても、高野浩論文に接して、散文に  
充分に意を払えていなかったことを早速思い知らされた。それで成した  
のが本稿である。高野氏、それに今西氏には感謝の意を表したい。また、  
本稿でも度々その内容に言及した拙著を併せ読まれることを冀う次第  
である。